



Title	『和漢朗詠集』上巻における「季節夜」：公任による再分類の操作から
Author(s)	大久保, 水貴
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 33-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106316
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『和漢朗詠集』上巻における「季節夜」

—公任による再分類の操作から—

日本文学・日本語史学 博士前期課程 1 年

大久保 水貴

はじめに

藤原公任撰『和漢朗詠集』（以降、本集）上巻は春・夏・秋・冬の四部門からなり、各部門の内部に小項目が配される。各項目内部では原則として中国漢詩・日本漢詩・和歌の順で入集している。本集編集に際し大江維時撰『千載佳句』（中国漢詩の詞華集）と撰者不明『古今和歌六帖』（和歌の詞華集）を主要な依拠資料としたことは通説となっている。また、本集上巻の配列が各部門の前半は『千載佳句』に、後半は『古今六帖』や先行の勅撰集の歌群配列に準ずることは、既に指摘がある。

本稿が扱う「季節夜」項目は、『千載佳句』の配列に倣って立てられた項目であり、先行歌集には見られない分類である。すなわち公任によって初めて「季節夜」に和歌が分類されることになったのだが、その際の編集操作はいかなるものだったのか、それは後代の和歌表現にいかなる影響を与えたのかという点について明らかにしたい。

1. 各季節夜の編集操作と後代への影響について

編集操作については、季節「夜」関連歌の用例数の乏しい「春夜」「冬夜」と、用例数の多い「夏夜」「秋夜」とで異なるため、二節に分けて扱う。なお、用例調査は『万葉集』・三代集・主要私家集を対象として行った。

1-1. 「春夜」「冬夜」

以下に、「春夜」「冬夜」に一首ずつ入集している和歌を掲げる。

- | | |
|--------------------------------|----|
| 28 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる | 躬恒 |
| 358 思ひかね妹がり行けば冬の夜の川かぜさむみ千鳥鳴くなり | 貫之 |

「春夜」28 番歌は『古今六帖』第六・むめ（梅）、『古今集』一・春上（梅歌群）にも見えることから、当時は「梅」の歌として認識されていた。本集春部に「梅」項目が別に立てられている以上、「春夜」への配置は不審である。「冬夜」358 番歌は『古今六帖』第六・千鳥に入集している。『拾遺和歌集』四・冬、『貫之集』第三・冬にも見えるが、いずれも特定の歌群に属していない。358 番歌から「冬夜」関連歌であると見ることはできても、それが直ちに「冬夜」項目への採用に結び付くとは限らない。

用例を調査すると、「春夜」関連歌では月・霞・夢・花などの語を、「冬夜」関連歌では霜・氷・月・鶯・鴨などの語を含む和歌が多く、28 番歌・358 番歌に見えるような「梅」「闇」「千鳥」「川風」の例は比較的少ない。特に「春の夜の夢」は「春夜」関連歌に特徴的な表現であるが採用されていない。つまり、両項目における採用基準は、用例数の多寡ではなかったと考えられる。

採用基準として第一に考えられるのは、秀歌を選ぶという意識である。28 番歌は公任の秀歌撰『金玉和歌集』に入集している。一方、「春の夜の夢」に関連する和歌は公任のいずれの秀歌撰にも入集していない。358 番歌は『金玉和歌集』『深窓秘抄』『三十六人撰』など公任の複数の秀歌撰に入集しており、歌学書『新撰髓脳』では「是らなんよき哥のさまなるべき」と高く評価されている。

用例の多さに関係しない和歌が本集に採用されることにより、以前は乏しかった「闇はあやなし」「川風寒み」の用例が増えていく。

さみだれのやみはあやなしみぎはなるほたるのひかりかくれなければ

(『東宮学士義忠歌合』・左・水上夜蛩・17)

橘のかをとめて鳴くほととぎすやみはさ月もあやなかりけり

(『正治初度百首』下・信広・夏・2128)

冬の夜の川風さむみ氷しておもひかねたる友千鳥かな

(『正治後度百首』季保・冬・氷・50)

人またばいかにとはましさ夜千鳥川風さむみ冬の明ぼの

(『老若五十番歌合』・百九十五番・右・宮内卿 390)

「闇はあやなし」の後代の用例には、原歌の季節・景物を離れるものが見られる。義忠歌合は五月雨の夜の蛩、信広歌は五月の夜の橘の香を詠み、いずれも春・梅を離れている。しかし「隠れることができないのだから闇は無意味である」という原歌の論理は正確に保たれている。信広歌の「さ月も」は「春の夜だけでなく夏においても」ということであり、「闇」を詠む型を前提としているからこそ可能になる表現である。すなわち、本集の「春夜」という新たな枠組みにより焦点が「梅の香りの強さ」から「闇はあやなし」という表現とその論理に移ったことで、後代に表現が発展していったものと考えられる。

一方「川風さむみ」と「千鳥」を詠む例には、季節・景物の転換が見られない。358 番歌は原歌の段階ですでに「冬の夜」を詠み込んでいることが影響しているだろう。焦点の移動自体が起こりにくいため 28 番歌のような読み替えは見られないが、本集に採用されることで「冬の夜」「川風寒み」「千鳥」という景物の取り合わせが定着したと考えられる。

1-2. 「夏夜」「秋夜」

「夏夜」には三首、「秋夜」には二首の和歌が採録されている。なお、底本において作者名が記されていないものは [] 内に作者と思われる人物名を記している。

153 夏の夜を寝ぬに明けぬといひおきし人はものをや思はざりけむ

[あすかの皇子]

154 ほととぎす鳴くや五月のみじか夜もひとりし寝れば明かしかねつも 人丸

155 夏の夜の臥すかとすればほととぎす鳴くひと声に明くるしののめ [貫之]

238 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む 人丸

239 むつ言もまだ尽きなくに明けにけりいづらは秋の長しといふ夜は 躬恒

「夏夜」入集歌について、153 番歌は典拠が不明であるが、同歌が公任の秀歌撰『深窓秘抄』にあすかの皇子作として入集している。154 番・155 番歌は『古今六帖』に入集しており、それぞれ第五・ひとりぬ（独り寝）、第六・ほととぎすに入集している。

「秋夜」入集歌について、238 番・239 番歌は『古今六帖』に入集しており、それぞれ第二・山どり、第五・ふせり（臥せり）に入集している。

両項目の和歌を見てみると、「夏夜」は「短夜」、「秋夜」は「長夜」を共通のテーマとすることがわかる。用例を調査すると「短夜」「長夜」表現は歌群を横断して非常に多く見られる。また、「夏夜」「秋夜」所収五首と公任の秀歌撰類との重複を確認すると、239 番歌のみ入集が見られない。すなわち、秀歌意識は一定程度認められるものの「春夜」「冬夜」ほど徹底してはいない。したがってこれらの項目では、秀歌意識を一次的な条件としつつ、さらに別の基準が二次的に働いたと考えられる。

その二次的な基準は、「短夜」「長夜」の和歌表現における対応である。具体的には、(1)「ほととぎすの鳴く一声で明けてしまうほどの短い夜」(155 番歌)・「山鳥の尾のように長い夜」(238 番歌)という比喻表現、(2)「独り寝ゆえに短夜も明かしかねる」(154 番歌)・「長夜を独りで寝る」(238 番歌)・「共寝ゆえに長夜も睦言の尽きぬうちに明ける」

(239 番歌)という独り寝や共寝に由来する体感的な表現、(3)「物思いをしていれば短い夜などとは思わない」(153 番歌)・「長い夜とかいうものはどこにあるというのか(239 番歌)」という反語的表現で対応が見られる。

後述するが、作者を考えると 153 番あすかの皇子歌の採用はやや異質である。しかし反語的に「短夜」を詠う和歌の用例は他に見られず、(3)の対応関係を成立させうるのはこの一首であった。すなわち「夏夜」「秋夜」について、テーマ・表現の対応関係を意識してこれら五首が採用されたと考えるのが妥当であろう。

本集以前から「短夜」「長夜」表現は多く、後代の和歌について本集を踏まえた判断することは難しい。しかし比較的用例の少ない反語的表現については、本集を経由したと見られる例が後代に見られる。

ほととぎすまつはひさしき夏のよをねぬにあけぬと誰かいひけん

（『千載和歌集』三・夏・仁和寺のみこのもとにて、郭公の歌
五首よみ侍りける時、よめる・按察使公通・148）

いづら秋のながしてふ夜は名のみしてつきぬなごりぞありあけの月

（『千五百番歌合』恋一・千百七十一番・左・女房・2340）

公通歌は153番歌の「寝ぬに明けぬといひおきし人」を、千五百番歌合歌は239番歌の「いづらは秋の長しといふ夜は」をほぼそのまま引いている。前者が『深窓秘抄』を、後者が他出である『古今集』を踏まえたという可能性も捨ててはできない。しかし、本集以前には用例の少なかった表現が本集成立以降見られるようになることを踏まえ、両項目において「短夜」「長夜」という主題を共有しつつ異なる表現の和歌を対応させるように並べるという操作によって、認知度の低かった表現が広く示される契機となったと考えることができるのではないかな。

2. 作者について

「季節夜」和歌の作者は貫之・躬恒・人麿・あすかの皇子である。貫之・躬恒は『古今集』撰者であり、公任は歌論書『新撰髓脳』にて「中比の上手なり」と評している。公任の人麿評価については定説を見ないが、公任の秀歌撰における入集歌数の増加、および公任の評価する貫之が『古今集』序文で人麿を称揚していることから、一定の評価があったと見て良い。『後撰和歌集』作者の和歌が入集していないことも勘案すると、古今集時代に評価の高かった歌人への意識が伺える。他方あすかの皇子は、相当する人物の和歌が『万葉集』・勅撰集・主要私家集に見えず、当時として和歌の評価の高かった人物とは言い難い。

すなわち、一定程度作者意識はあるものの、テーマ・表現において対応関係を持たせる場合はその限りではない、という優先度があったと考えられる。

おわりに

漢詩の詞華集に由来する「季節夜」項目における和歌の編集操作、ならびに「季節夜」歌受容について考察した。「春夜」「冬夜」では和歌の採用に際して秀歌意識・作者意識が強く見られるが、関連歌の豊富な「夏夜」「秋夜」では、これに加えてテーマ・表現を対応させることも基準となった。

公任自身がどの程度後代への影響を意識していたのかは不明であるが、先例のない項目への分類という編集行為によって、本集以前には認知度が低かったはずの表現が結果として前景化することで、後代の和歌表現の下敷きとなった。本集「季節夜」項目はその表現史の転換点を示す一例として位置付けられるのではないかな。